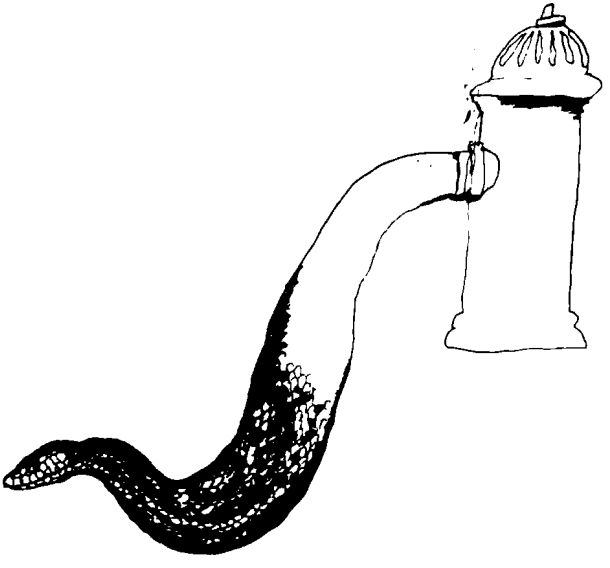
色川武大

ぼろぼろ漂遊記

ぼうふら漂遊記

色川武大



新潮社

ぼうふら漂遊記

昭和五十四年三月十日印刷
昭和五十四年三月十五日発行

定価八〇〇円

著者　色川武大
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
電話 業務部03(266)五一一一
編集部03(266)五四一一
振替東京四-八〇八番

印刷　二光印刷株式会社
製本　大口製本株式会社

© by Budai Irokawa 1979 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

ヴェガスの朝の月　5
地中海のタキシード　32
ロンドン・デイグル一家　58
太平洋の坐りダンス　82
エジプトの大穴ぼこ　107
ベイルートの夏の陣　131
ぐるぐるぐーるぐる　150
ニューヨークの縁の下　176
フロリダ街道眠り狼　203

装画・挿絵　永田　力

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぼうふら漂遊記

ヴェガスの朝の月

カミさんと別れたので、記念にひとつ、なにかとめどもなくくだらないことをしてやろうと思う。

すると、元カミさんがこういった。

「そういうことを考えるから武ちゃんはずるい。元あたしというものがありながら――」

そういうことといったって、まだ何をするか、考えついちゃいない。

「どういうことにしたって、ひとりで遊ぶんでしょう。ずるいわ。あたしもやるわよ」

「そりゃご自由だ。君はもう君の責任ですべてを定めればいい」

「ひどい人ねえ」

「しかし我々はもう別れたンだ」

「つい昨日までは一緒だったわ」

「うん――」

「あたしだって、男を、つくるわよ」

「もちろんそうすべきだと思う」
「――で、何をしようと思ってるのよ」
「そうだな――」
「遊んでる身分じゃないでしょう。働らきなさいよ」
元カミさんは不機嫌だ。私の方も、新らしいカミさんを造ってから別れるという手続きを怠たって、そそっかしく事を運んでしまったために、ぽつんとがらんどうの部屋にとり残された感じで、機嫌がいいとはいいかねた。まったくカミさんというものは、有って不便、無くて不便、不便きわまる代物だ。
さて、そこで、何をしよう。
もう五六年前のことになるけれども、アキレタボーイズ麻雀新選組というグループをつくって、おおいに遊んだ。あれは面白かった。言語道断陋劣無残というところが実によい。けれども、唯一の欠点は飽きるということで、どんなことだって飽きてしまっては何の取柄もない。そのくらいなら働らいている方がよっぽどよいので、そこを乗り越えて遊ぶとなるとなかなかむずかしい。
私は、寒々しい部屋で、元カミさんのお情けでひとつだけ残してもらった小型のガスストーブに股火鉢をして、口から出まかせの鼻唄を唄った。
天上天下神はなく
罪はあれども罰はなし
ただ官能を刺激して
とりとめもなく我れは在り

あっというまにアメリカに来た。ロサンゼルス国際空港についた飛行機のタラップをしかつめらしい顔つきでトコトコと降り、同じくそのしかつめを顔の表面に残したまま、ウエスタン航空の飛行機のタラップを昇るために、いったん国際線の建物を出て、黙々と街路を歩いた。いつ来てもそうだが、この国で一番先に眼に入るのはだだっ広い道路であり、その上を右往左往する車である。

ロス在住の日系人で、某という功成り名とげた老夫婦が居るが、夫妻は週に一度、必らずラスヴェガスに向けて車を駆る。それが無上の楽しみなのだそうで、私もあるときその車に同乗させて貰ったことがあるが、まことに壮烈、鬼神をも泣かしむる趣(おもむ)きがある。八十歳に近いご亭主がハンドルを握り、妻女が助手席に坐って、

「グランパ、右にハンドルを切って」

或いは、

「はい、信号青、どうぞ」

それからまた、

「スタップ――！」

だとか、

「この先左へカーブよ、そろそろスピードを落して」

ことごとに指令する。ご亭主、苦笑まじりに、うちのグランマは口がうるさい、などといっているが、なんぞはからん、グランパは底翳(そこひ)でほとんど視力がないのである。

「なァに、街を出ればまっすぐだから――」

ロスからヴェガスまで砂漠をまっすぐに、盲目に近い老人が弾丸のように往復するわけで、ドンブリで茶漬をかっ喰らうような、いかにもアメリカらしい大味な話ではあるまいか。

その直線道路の上をさらに大味に飛行機でひと飛びしている。この飛行機は自由席なので、おくれていってアメリカ人の間にはさまった席にでも坐ろうものならひどい目に会う。アメリカ人というのは世界中で一番屈託のない人種で、それが遊び場に行くのだからいやがうえにも外向的になって、こちらが何故、しかつめらしく黙々としているかを考えない。まず煙草をすすめてくる。片手でことわると今度はガムである。そこで手を出せばぺらぺらッとくるきっかけになるから、いずれも無視してしまう。すると黙るどころか、いい旅だな、心が弾むな、ねえ君、君はどこから来た、何人だ、ホンコンかい——。

そういえば先年、パリのアメリカ系ホテルに止宿していたとき、こんなことがあった。言葉のできる相棒が寝坊なので、私は朝の時間をもてあまして、毎朝街路をひとりで歩いてくる。ある朝ホテルに帰ってきて自動のエレベーターを一人で動かそうとしていたら、おりあしく、米人老夫婦があとから乗りこんできた。アメリカ人で老夫婦ときたらこれはもう百年目である。

お早よう、いい朝ですな、ペラペラペラペラペ。

私の階は十六階で、老夫婦も奇しくも同じらしい。エレベーターがまたのったりしてやがる。

ペラペラペラペラペラペ。

私は意を決して重い口を開いた。ノウスピーキング、というつもりで、

「ノウ、スモウキング——！」

舌がひきつっているくせに、そういうときは大きな声が出る。ノウスモウキング。誰も煙草など吸ってない。老夫婦はぎょっとなった顔つきでぴたりと口をつぐんだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あとで相棒がこういった。いいまちがえてよかったね、あンたがいいたいのは、アイキャーント　スピークイングリッシュ。ノウスピーキングなら、黙れッ、ってことだ。ちゃんといえてたら殴られてたかもしれないよ。

だから、隣りが外人だとなると、坐るより先にさっと居眠りに入る。私は幸い寝つきはひどくよいが、長い時間、身動きもせず押し黙って寝放しというのは辛い。で、早目に機内に入って、窓際の席をとり、今回の相棒であるミセス・アンを隣りに坐らせて防波堤とした。幸いなことに彼女の向う側に坐ったのは日本人で、万全のうえに目張りをしたようなものである。

「阿佐田哲也さん――？」

アンの向う側の青年が彼女を飛び越えて声をかけてきた。私は大遊びしていた頃の名残りの別名があって、これは半分タレントのようなものだから、日本語で話しかけられるかぎり応答しないわけにはいかない。

私が頷ずくと、彼はニヤッとした。

「日本のNO1ギャンブラーだな」

その笑い方が気にいらない。日本の一部の若者たちが私のことを〝ばくちの神さま〟と呼ぶ。むろん、ていのいい蔑称であるが、こんなに露骨に表に出さない。

「日本に居るころチラと読んだことがあります。こちらに来てから麻雀も忘れたが、顔つきが変ってるからすぐわかりましたよ。ははは、ヴェガスは、取材ですか」

「いや――。プライベートです」

「いいですな。悠々閑々ですか」

悠々閑々ではまったくないけれど、そんな顔をしているほかはない。カミさんと別れてヴェガ

スへ来ちゃった、といういいかたをもしも口にするとなると、おそろしくナンセンスで私自身も気味がわるい。

彼は自分の姓名を名乗り、続いて、なんとかの息子だといった。親もとが政界方面の有名人らしかったが、こういう場合の常で、親の方の名前はきき流してしまう。

「ところで、種目はなにをおやりです」

「今度の旅では、ルーレットを軸にするつもりです」

「ルーレットか――」と彼はいった。「アメリカじゃ、あまり盛んじゃないな」

「知ってます。盛んじゃないだけに、ヴェガスのルーレットは比較的甘いからね」

「ぼくは、バカラ（西洋風オイチョカブ）専門だな」

「でしょうな――」私は頷ずいた。バカラは他種目にくらべて格段にレートが高いので、普通の旅行者は手がでない。しかしそれだけにカジノの華であり、ハウス側も最上客に対する礼をつくすのである。

「ルーレットやブラックジャック（日本名ドボン）では金嵩がはらんでしょう。バカラはやらないンですか」

「やりますよ。しかしこのところ、ルーレットに凝ってます」

「この前は、三万五千ドル、勝ったな」と彼はたいして自慢気でもなくいった。「ぼくのは上り下りが大きくてね。しかしツイたらとまらない。――阿佐田さんは、最高どのくらい勝ちました」

「私はいつも、とにかくプラスになるのが目標です。たとえ十円でもね」

「ほほう、しかし、これは横綱のセリフらしくありませんなァ」

「いや、ギャンブルとはそういうものだと思っています。石にかじりついても十円は浮く覚悟です」
「なるほど。貴方はきっと浮きますよ。ご幸運を祈ります」
この青年に、再度、嗤われたという感じが、ざらっとあとに残った。

私と、相棒のミセス・アンは、契約したホテルに隣りあった部屋をとっておちついた。なにしろ私は国外に出たら電話にも出られない男で、だからベルが鳴れば飛んでこられるほどの近さに相棒が身構えている必要があるが、それぞれの部屋は、むろん、鍵で区切られており、ぶしつけに私はアンの部屋に行かないし、アンもまた私の部屋に来ない。私はアンのご亭主と友人であり、こうして二人で遠く海外に出かけてきても、ご亭主との友好関係は変化させようと思わない。理解できないという人もあろう。私の元カミさんなどは特に理解しないが、理解に苦しむことはこの世に珍らしくないし、当事者が呑みこんでいればそれでよいのである。

その点さえ呑みこんでしまえば、彼女は実に得がたい相棒なのである。ユダヤ人の母と日本人医師との間にできた混血児であり、ハワイ生まれのロス育ち、日本の女子大とアメリカの大学を出、ロンドンで日本人写真家と結婚し、日本国籍をとって東京にきて私と知り合った。これだけでも多彩であるが、彼女の前のご亭主はジャズギターのバーニー・ケッセルで、彼と一緒に世界じゅうを仕事で歩いているので、まことに旅なれている。基本的には英語人種であるが、外形的には日本人であり（女の子は父親に似るという）、彼女の日本語をきいてハーフと見破る人はまず居ない。

昨年の秋、ふとした話のなりゆきから、彼女は私の弟子になりたいといった。
「弟子って、なんの――？」
「ほんびきを、教えて」
私は面喰らった。鬼面人をおどろかす物言いは当今の常だが、ここまでひねられるとやはりおどろく。ほんびきとは、東映やくざ映画で藤純子がやって見せたりした手配博打の一種で、おおむね専門家しか知らぬものであり、したがって警察がもっとも神経をとがらせているものである。
「知らぬとはいわぬが、ほんびきを、アンがやるのか」
「いいえ、やらないわ。でもあのゲームのセオリーは深いものなンでしょう。そういう深いものを知りたい。アン、日本のことをもっと知りたいの。日本では学校で教えてくれることしか教わってないわ」
「ふうん――」
「アンは一人っ子だから、肉親というものがもうこの世に居ない。お父さんの家のお墓が鎌倉にあるの。だから、本当は、鎌倉に住みたかったのだけれど」
よろしい、と私はいった。文武百般を教えましょう。それが何になるのかは皆目見当がつかないけれど、だからこそ覚えておいて損はないかもしれない。私は学校というものに行かなかったから、学校で教えないことを教える資格は充分にある。
しかしながら、弟子ともなれば、師匠のいうことはきかなければいけない。師匠は今、一大愚挙をやらんとしている。師匠の愚挙に手を貸すことは弟子たる者の務めである。
ざっとこういう経緯で私たちは相棒になった。ますます理解に苦しむという人もあるかもしれない。そうなると、ざっとでなく綿密に記しても同じことで、わからんといえば、愚挙なるもの

がさっぱりよくわからんのである。だから、私の相棒がアンだということ以外、なにもおわかりにならないでいただきたい。

しかし、ともかく、我々はラスヴェガスにまできてしまった。

私たちはまず食堂で、アメリカ風の固い肉の塊りを喰った。それから、海を眺めるように、カジノ場を眺めた。

「昂奮する――？」

「するよ」

「神さまとしては、どうするの」

「どうもしないさ。昂奮して眺めてるんだ。しかし眺めるということは存外大切でね。こうして眺めていて、できるだけ実体というものに接近していきたい。それはばくちの準備体操だからね」

アンは講義をきく顔つきになった。

「実体とは何か。それは一見とりとめもないものだ。そうして再見してもやっぱりとりとめがない。そう簡単に一面の特長に代表されるものじゃない。たとえば、ばくちというものは、手を出すから負ける。出さなければ負けやしない。そうだろう。しかし同時に、手を出さなければ勝つ可能性もない。勝とうとするならば負ける可能性を購わなければならない。そういう二律背反がいくつも重なりあって、とりとめのない風貌をつくっているのだ」

「むずかしいけど、なんでも五分五分の可能性があるってわけ」

「いや、五分五分じゃない。勝つ根拠が八分あるなら、それは同時に負ける根拠も八分あるということだ。そうでなければ勝つ根拠とはいいがたいんだ」

「では、選べないわ」
「選べないよ、簡単には」
「どうするの」
「手を出すから負ける、手を出さなければ勝つ可能性もない。この場合の最大公約数は、手数を最小限度に出すことだろう。こういうふうにたくさんの二律背反をひとつひとつ公式をとくように答をわりだしていくんだ。これがセオリーだ。しかしセオリーは万能じゃない。何事もそう簡単には片がつくものじゃないのでね。ばくち打ちは、だから、一方でセオリーをがっしり身につけ、セオリー以外の無計算な動きをしないように努める。またその一方で、セオリー群をはるかに乗り越えた絶対の方法を夢見るし、追い求める」
「ギャンブルに絶対なんてないでしょう」
「ところが、さっきいったことと矛盾するようだが、そうとも限らんよ。蓄音機ができ、テレビが発明されたように、新らしい知恵がぽつりぽつり開発されてくるものだ。ただ、その知恵が絶対の極め技でありうるのは最初の一瞬だけで、まもなく対抗策ができたりして通用しなくなるか、せいぜいセオリーの一環になるくらいがおちなんだ」
「犯罪の手口なんかと同じね」
「まあ、眺めてごらん。アンには何が見える」
「べつに。これといってわかりやしない」
「いや、これ以上は疑がっても仕方のないごく当然のところまで、後戻りをすればいいんだ。何が見える」
「人が大勢、遊んでいるわ。それから、その遊びのお相手をして立ち働らいている人たちが居

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com